岡山県立博物館だより

41号
10月1日
1993

「なりわいの知恵」－とる・つくる・たべる－

― 平成5年度　特別展の開催にあたって ―

館長　橋本泰夫

岡山県立博物館では、平成5年度特別展「なりわいの知恵」を10月23日から11月23日まで約1か月間にわたり開催することになりました。

この特別展は、古来から人間が生きていくために営んできた狩猟・採集、漁業、農業、製塩の四つの産業に目を向け、いつの時代にどのような技術の発展があったのか、そしてその技術が私たちの祖先の生活をどのように豊かにしていったかを、各種の資料を通じて見ていただこうとするものです。

人類が生きていくうえでの最大の課題は、つきつめていけば安定的な食料の確保ということになろうかと思います。私たちが住む日本列島に人類が生活を始めたのは十万年前とも数十万年前とも言われておりますが、苛酷な自然条件のなかで食を確保することに文字通り命がけの努力を払ったに違いありません。人間の知恵や肉体を極限なまでに駆使しての原始的な狩猟・採集生活から、徐々に石器や木器の使用などによってその技術を高めていったことと考えられます。こうした自然に依存し、そして共生していた狩猟・採集生活は、長い人類の生活史上その大部分を占めているわけですが、今から約一万年前に西アジア地域をはじめとして各地で作物栽培が始まり、人びとの生活形態は、自然に働きかけ、そして自然を活用する方向に大きく転換することになりました。

日本列島において農耕が始まるのは、世界の先進地域よりかなり遅れて縄文時代晩期、今から二千数百年前に大陸から稲作が伝来して以降と言われております。この水稲栽培は短期間のうちに東北地方まで広がり、以来今日に至るまで米は日本人の基幹食料としての地位を占めることになりました。

しかし、この裏にはイネという亜熱帯植物を、温帯地域に馴化させ、そして安定作物として固定させるため、幾世代にわたりたゆまない技術向上のための努力が続けられたことを見逃すことはできません。特に水の制御が不可欠な稲作農業には、水田造成、灌漑施設などの農業土木はもちろんのこと、水利調整、品種・栽培方法の改良などを含め、総合的・多角的な技術の確立が必要で、それぞれの時代の学問、技術分野の総結集がはかられたことと思います。

このように人類は、安定的で豊かな生活を求めて技術の向上に不断の努力を傾け、現在にみられるような豊かな社会を形成してまいりました。

今回の特別展で、原始時代から私たちの先人が自然と共生しながら、また自然に積極的に働きかけながら懸命にいきてきた“なりわい”の諸相をみていただくとともに、現在の成熟化・肥大化した地球環境のなかで、人間と自然とのかかわりをあらためて考えていただくよすがにしていただければ幸いであります。

終りになりましたが、今回の特別展への出品をこころよく御承諾くださいました所蔵者の方がたをはじめ、御指導御協力を賜りました皆様に心から御礼を申しあげます。

平成５年度　特別展

「なりわいの知恵」

－とる・つくる・たべる－

平成5．10．23～11．23

今回の展覧会は、私たちの祖先が日本列島に展開した、狩猟・採集、漁業、製塩、農業などのなりわい（生業）に目を向け、それぞれの分野での、どのような努力がなされ、新しい発明発見が積み重ねられてきたのかを、できるだけ具体的に紹介しようとするものである。

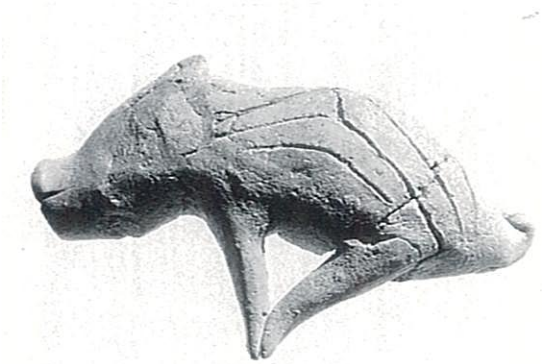
狩猟・採集

狩猟は自然相手の命がけの闘いで、獲得できる成果は自然に左右されるところが多く、自然をつかさどる神々の味方なしでは成功しないものであった。奈良時代以降、仏教の広がりに伴い、殺生を忌避する風潮が強まっても、山の民は山から、海の民は海から、生きていくための栄養源を確保しなければならなかったし、農耕・栽培の営みを脅かす害獣は駆除されなければならなかった。このため、人々は獲物の霊を慰める儀礼を行ない、同時に、儀礼を通じて獲物の再生を祈った。

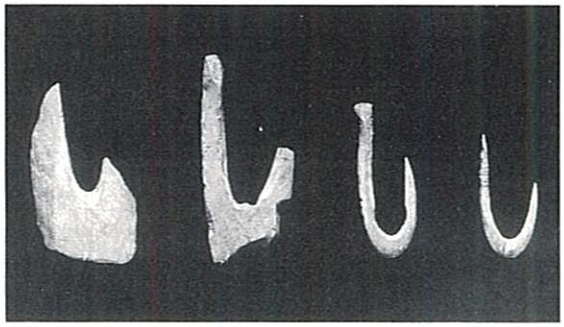
また、神から与えられた獲物は肉・内臓・脂・骨・皮・筋・血液まで、最大限利用されるのが常で、食料のほか、衣料・装身具として、また医薬品、あるいは道具の材料として、それぞれの時代の人々の生活を支えたのである。

狩猟の対象とされた獲物は、鳥・兎・猪・鹿・熊・かもしかなどが主要なものであった。狩猟法には、きめ細かい自然観察の中から動物の生態を知って、これを利用するという原始時代以来一貫してきた基本的法則がある。また、効率よく獲物を確保するためには、道具や方法に工夫がなされた。犬と弓矢の利用は縄文時代に始められた。近世に鉄砲が弓矢に取って代わると、より確かに、豊かに獲物を確保することが可能となった。

今回は、狩猟法の変遷を、用具を通して紹介し、獲物がどのように生活の中に生かされてきたかなど、そこに見られる人々の知恵を探っていきたい。



猪埴輪　前橋市城南出土　国学院大学考古学資料館



骨角製釣針　　神奈川県夏島貝塚
縄文時代　明治大学考古学博物館

漁　　業

藤原京や平城京跡から出土した木簡や律令国家の「賦役令」や「延喜式」によると、堅魚・鯛・鱸・鯖・鯵・赤魚・鰯・烏賊・蛸・熬海鼠・鰒・年魚・鮒・鱒・鮭をはじめ多種の魚介類が各種の税として貢納されたことが見え、これらが、多く塩乾物に加工され送られていたこともわかる。

日本列島における漁業は縄文時代に始まったといわれ、神奈川県夏島貝塚から出土した骨角製釣り針は、我が国最古の釣り針として知られる。当時釣り糸に何を使用したかは明らかではないが、糸かけ部分に刻みや突起があって、糸がはずれない工夫が見える。県内では、津雲貝塚から針先に返しのある釣り針も出土している。縄文時代は、漁業に依存する度合が大きくなった時代で、この時代に我が国の漁法の基本はすでにできあがっているように思われる。

展覧会では、縄文時代以降の主要な漁具に見られる技術発展のようすを、考古資料や銅鐸絵画・絵巻物など絵画資料、古文書などによって紹介し、私たちの祖先がどのような知恵をもって漁業を営んできたのかを考えてみたい。また、古くから我が国近海で行なわれた鯨漁のようすを伝える資料を紹介し、日本人と鯨についても考えたい。

製　　塩

岩塩に頼ることができなかった我が国では、初め塩は土器で海水を煮詰めて作られた。瀬戸内沿岸では弥生時代中期に児島周辺で、製塩土器が出現する。古墳時代にかけて見られる倉敷市児島城遺跡出土の土器などがこれである。「長門国正税帳」（正倉院文書）などには鹹水（濃度の高い塩水）を煮詰めるための直径1.6mの「煎塩鉄釜」が使用されたことが見える。鉄釜の使用は製塩土器に代わる新しい技術革新と考えられ、また石釜も使用されたと推定される。これらの使用が広がりを見せるなか、平安時代には製塩土器は姿を消すのである。鹹水を鉄などの釜で煮詰める製塩は昭和30年代半ば、イオン交換樹脂膜法による製塩が始まるまで、我が国製塩の基本であった。

塩の需要が増してくると、大量の鹹水を得るため、粘土で固めた塩田を築き、これにまいた砂に海水を注いで塩を結晶させ、これに海水をかけては濃い塩水を得る方法が工夫された。海水を人力で汲み上げてまく揚浜式が、次いで、瀬戸内では潮の干満を利用して、人力による汲み上げを省いた入浜式製塩が開発された。日本海沿岸で、近年まで用いられた揚浜式塩田用具と、瀬戸内の入浜式塩田用具を比較しながら、製塩技術の中に、私たちの祖先の知恵を探ってみたい。

製塩土器
倉敷市児島城遺跡出土
弥生中期
岡山県古代吉備文化財センター

農　　業

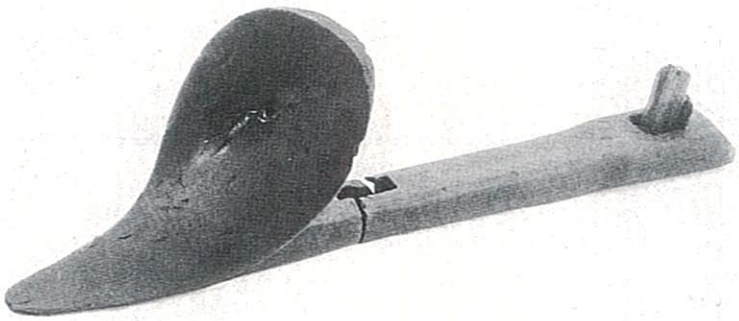
大陸から伝播した米作りの新しい技術と知識は、従来の狩猟・採集を基礎とする生活から農耕社会へと、社会構造の本質的な変革をもたらした。人々は用途に応じたさまざまな農具を工夫し、人工の灌漑施設を築いて、耕地の拡大を図ってきたが、我が国の農業における技術発達の歴史は稲作りを中心に展開されたといっても過言ではない。

県内の百間川、上東遺跡や福岡・香川・滋賀県・大阪府などの弥生時代の水田遺構を伴う遺跡からは、鋤・鍬・馬鍬・臼・杵のほか、農具生産用の加工用具（石器・鉄器）が出土している。その基本的形態は私たちが知る農具とほとんど変わらないものである。鴨部・川田遺跡（香川）と大中の湖遺跡（滋賀）では鍬の製作工程を示す遺物が出土し、下川津遺跡（香川）からは畜耕の存在を思わせる我が国最古の古墳時代の犂が出土して注目される。

擂鉢　　広島県尾道遺跡出土
室町時代　　尾道市教育委員会

中世から近世にかけては、多様化する農具の変遷に見られる祖先の知恵を探り、江戸時代、技術の普及に大きな役割を果たした農書（農業技術書）も紹介したい。また、県内に所在した足守庄や荒野庄の絵図から当時の土地開発のようすを紹介するほか、近世中期以降、特に県南部地方で行なわれた大規模な干拓事業による耕地拡大と、灌漑・運河用に掘削された倉安川、高梁川に築造された湛井堰に見られる土木技術について考えてみたい。

このほか、縄文時代以降、県内をはじめ、尾道や福井県一乗谷朝倉氏遺跡など、各地の遺跡から出土する煮炊き用の甕やその他調理用具の移り変わりを紹介して、食べ物がどのように調理されたのかを探り、また、『つく・こねる・する』と題して、「こね鉢」のほか、平安時代末期に新たに出現したと考えられる「擂鉢」という器は何であったのか、擂鉢の出現は何を意味するのかなど、身近にある、意外に知られていない問題についても触れてみたい。



犂　香川県下川津遺跡出土
古墳時代
香川県教育委員会

主な展示資料

◎重要文化財
○県指定重要文化財

名　称	時代	（遺跡）	所　蔵　者
〈漁業〉			
鳥浜貝塚出土資料	縄文	福井県鳥浜貝塚	福井県立若狭歴史民俗資料館
銛頭	縄文	岩手県瀬沢貝塚	東京国立博物館
筌（うけ）	弥生	福岡県辻田遺跡	九州歴史資料館
彦火々出見尊絵巻	江戸		小浜市　明通寺
◎近江名所図屏風	室町		滋賀県立近代美術館
◎東寺百合文書	鎌倉		京都府立総合資料館
骨角製釣針	縄文	神奈川県夏島貝塚	明治大学考古学博物館
骨角製釣針	弥生	島根県西川津遺跡	島根県埋蔵文化財センター
捕鯨図絵馬	江戸		石川県　神目神社
○能登国採漁図	江戸		石川県立歴史博物館
土佐捕鯨図絵	江戸		高知県立図書館
〈農業〉			
石鍬	縄文	岡山市百間川遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
馬鍬	古墳	福岡県カキ遺跡	㈶北九州市教育文化財事業団
犂	古墳	香川県下川津遺跡	香川県教育委員会
人物埴輪（農夫）	古墳	群馬県石山所在古墳	東京国立博物館
○民家検労図	江戸		石川県立歴史博物館
四季耕作図屏風	江戸		石川県能都町教育委員会
〈製塩〉			
製塩土器	弥生	倉敷市児島城遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
製塩土器	6世紀	津山市小原1・2号墳	津山市弥生の里文化財センター
製塩土器	古墳～7世紀	広島県尾道市満越遺跡	尾道市教育委員会
周防国正税帳（複製）	奈良		国立歴史民俗博物館
兵庫北関入舩納帳	室町		個　人
文正草子	江戸		杉野学園衣装博物館
海浜風俗図屏風	江戸		兵庫県立歴史博物館
揚浜式製塩用具	近代		赤穂市立歴史博物館
入浜式製塩用具	近代		㈱日本たばこ　塩業資料館
〈調理〉			
煮炊き用浅鉢	縄文	倉敷市菅生小学校裏山遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
こしき・長胴甕	5世紀	岡山市高塚遺跡	〃
かまど・鍋	鎌倉	岡山市百間川米田遺跡	〃
炭化物入土製鍋	室町	広島県尾道遺跡	尾道市教育委員会
内耳付　鍋	室町	〃	〃
土師質羽釜	室町	福井県一乗谷朝倉氏遺跡	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
〈こねる・する・つく〉			
擂鉢	平安・鎌倉	岡山市鹿田遺跡	岡山大学埋蔵文化財調査センター
すりこ木	平安	岡山市鹿田遺跡	岡山大学埋蔵文化財調査センター
擂鉢	平安	津山市美作国府跡	津山市弥生の里文化財センター
擂鉢	鎌倉	倉敷市亀山遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
すりこ木・擂鉢	鎌倉	広島県草戸千軒町遺跡	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
擂鉢	室町	広島県尾道遺跡	尾道教育委員会
〈狩猟〉			
丸木弓	弥生	滋賀県大中の湖遺跡	滋賀県立安土城考古博物館
石鏃・石槍・石匙	縄文	笠岡市津雲貝塚	個　人
徳島県祖谷地方の狩猟民俗資料	近世～現代		徳島県東祖谷地方　祖谷平家村民俗資料館
水鳥線刻壺形土器	弥生	岡山市百間川原尾島遺跡	岡山県古代吉備文化財センター
鹿と弧文線刻鉢	弥生	岡山市百間川米田遺跡	〃
子持須恵器	古墳	久世町木谷古墳	〃
◎善教房絵詞	南北朝		サントリー美術館
鹿埴輪・猪埴輪	古墳	大阪府昼神車塚古墳	高槻市教育委員会
鏃のささる獣骨	縄文	静岡県蜆塚遺跡	浜松市博物館
粉河寺縁起（模本）			東京国立博物館
矢田地蔵縁起（模本）			〃
石山寺縁起（模本）			〃
〈採集〉			
スガイ貝殻古墳埋葬品	古墳	津山市大開3号墳	津山市弥生の里文化財センター
各種種子類	縄文	笠岡市原貝塚	笠岡市教育委員会

記念講演会

日時：11月6日（土）13：30～15：00

場所：岡山県立博物館講堂

講師：国立歴史民俗博物館副館長　佐原　眞氏

演題：「石から鉄へ」

岡山県立博物館だより　No.41
発　行　日　平成5年10月1日
発　行　者　岡山県立博物館
館長　橋本泰夫
岡山市後楽園1－5
☎（岡山）272－1149